様式第２号（第２１条関係）

むつ市地域おこし協力隊活動状況報告書

むつ市長職務代理者　むつ市副市長　川西　伸二　殿

隊員氏名　小池　拓矢

次のとおり活動したことを報告します。

【活動報告月：２０２３年３月分】

１．実施した活動の概要・状況

今年度の事業のまとめを行うとともに、来年度の事業計画の策定をした。また、長野県泰阜村で子どもたちの教育活動等を行っているＮＰＯ法人グリーンウッド自然体験教育センターの視察を行い、自らの活動にも生かすことのできる様々な学びを得ることができた。次年度、協力隊の活動は３年目の年に入るため、就職等も見据えた活動を行っていきたい。

（主な活動）

◇3月13日（月）～１５日（水）NPO 法人グリーンウッド自然体験教育センター視察

長野県泰阜村で「暮らしの学校 だいだらぼっち」や「子ども山賊キャンプ」などを実施している NPO 法人グリーンウッド自然体験教育センターを訪問し、子どもたちへの教育や自然を使った活動、NPO の経営について学んだほか、泰阜村村長様からも、NPO との連携などについて伺った。

今回の視察では、多くの子どもたちの教育を担う中で、どのような安全管理を行っているのかが大きな興味の対象だった。その中で「リスク」と「ハザード」の考え方について、スタッフの方から聞くことができた。「リスク」とは自ら挑戦する危険のことで、「ハザード」は子どもが認識できない危険のこと。例えば桟橋から川に飛び込むとして、子どもが勇気をもって川に飛び込もうとする行為は「リスク」、桟橋が朽ちていて、壊れて子どもが落ちるかもしれないというのは、「ハザード」といえる。このハザードを取り除くためには、別の飛び込める場所を探せばよく、泳げない子が川に飛び込んだ後溺れることがハザードであれば、ライフジャケットを着せることもできる。そもそも川に飛び込ませないことは簡単だが、それは子どもがリスクに立ち向かって成長できる機会を奪っているともいえる。

子どもがリスクに立ち向かうプログラムを作るには、大人がリスクとハザードについてよく理解し、それに対応するための知識と技術を身につけた上で、組織間で安全管理意識の共有をしなければならない。来年度からは、私たちもマリンアクティビティプログラムを本格的に事業化していこうと考えているが、これらの危険に対応するための技術の習得と安全のための意識共有は常に更新していかなければならない。